

ルター聖書における接続法の形態論的考察

工 藤 康 弘

本稿は、直説法と接続法の形態的対立という観点から、ルター聖書における動詞の形態を考察することによって、これに続く統語論的考察の予備的研究をなすものである。ここでは1546年版新約聖書のうち、四福音書を資料として用いる。¹⁾

文法範疇のひとつである Modus は、直説法、接続法、命令法を、動詞の活用によって区別する。ドイツ語の史的变化に伴い、動詞活用のパラディグマも変化している。本稿では、Mhd. から Nhd. への変化の中で、ルター聖書に現われる動詞の活用が、Modus の対立、とりわけ直説法と接続法の対立を、形態上どの程度表示し得る状態にあるかを考察していく。以下、Modus の対立に関する要素として、幹母音、および語尾における e の 2 つに分けて見ていきたい。幹母音の項目では、部分的に変化語尾をも検討する。

1. 幹母音

1.1. 直説法現在形と接続法 1 式²⁾

1.1.1. 強変化動詞

強変化動詞の現在人称変化に関して、Mhd. から Nhd. にかけて生じた変化のひとつに、単数形と複数形の幹母音の統合がある。³⁾ この変化を被った動詞は第 2 種、第 3 種の b、第 4 種、第 5 種である。次に示すのは、第 2 種動詞のひとつ biegen の直説法現在形と接続法 1 式を、Mhd. と Nhd. とで比較したものである。

	mhd.		nhd.	
	Präs.	Konj. I	Präs.	Konj. I
1 人称	biuge	biege	biege	biege

Sg.	2 人称	biugest	biegest	biegst	biegest
	3 人称	biuget	biege	biegt	biege
Pl.	1 人称	biegen	biegen	biegen	biegen
	2 人称	bieget	bieget	biegt	bieget
	3 人称	biegent	biegen	biegen	biegen

Mhd. では、単数現在形の幹母音がiuである。これによって、単数形における現在形と接続法 1 式の形態上の区別は、Nhd. よりも明瞭である。Nhd. ではiuが複数形幹母音ieに同化したため、1 人称ではModusの区別がなくなり、2 人称ではわずかに語尾のeによってModusの区別が保たれている。ルターでは1 人称にのみieが浸透し、2・3 人称ではeuを保っている⁴⁾。

次に、Mhd.における第3種のb、第4、第5種の動詞では、1 人称単数現在形の幹母音が2・3 人称と同様、iである (z. B. ich hilfe, nime, gibe)。従ってこの種の動詞では、1 人称単数における現在形と接続法 1 式の区別が明瞭である [z. B. ich hilfe (ind.): ich hëlfe (konj.)]。Nhd. では、この現在形幹母音iがeとなったため、形態上Modusの対立がなくなった。ルターにおける1 人称単数現在形の幹母音は、初期の著作を除いてはeである⁵⁾。

Mhd.の現在形でNhd.と異なるものとして、さらに3 人称複数の語尾-entがある。これによって3 人称複数では、現在形と接続法 1 式の区別が可能であった [z. B. sie gëbent (ind.): sie gëben (konj.)]。ルターでは、初期の著作に現在形語尾-entが散見するものの⁶⁾、1546年の福音書には見られず、Nhd.と同様、Modusの区別は形態上表示し得ない状態になっている。

1. 1. 2. 不規則動詞⁷⁾

過去現在動詞とwollenはMhd.において、古い2 人称単数現在形の語尾-tを部分的に残している (z. B. du solt, darft, wilt)。これが次第に語尾-stをとるようになっていったわけだが、ルターではsollenとwollenだけが語尾-tを保持している⁸⁾。とりわけ幹母音に変化しないsollenの場合、sの有無によってModusの区別がNhd.よりも明瞭である [du sollt (ind.): du sollest (konj.)]⁹⁾。

ところでsollenとwollenには、幹母音がöである語形がときおり見られる。Moserはwöllenに関して、この語形が円唇化によるものなのか、eとoの中間段階を示すものなのか、o ウムラウトなのか定かでないとしている¹⁰⁾。一方

söllenに関して Moser は、上部ドイツ語で複数形に好んでウムラウト (ü, ö) が用いられたとしているほか、接続法とウムラウトの関係も指摘している。¹¹⁾ Franke はルターにおける sollen と wollen が、ときおり接続法で変音するとしている。¹²⁾ ö の由来はともかく、ここでは共時的に見て、ö が o と対立しながら、何らかの統語論的機能を担っているかどうかが問題である。接続法 2 式まで含めて考えると、1546 年の福音書において、sollen の接続法で ö を用いているのはヨハネ 13 - 6 の 1 箇所だけである：

- (1) HErr, Söltestu mir meine füsse wasschen ?¹³⁾

「主よ、あなたが私の足をお洗いになるのですか。」

これと同じ 2 人称単数の接続法 2 式の sollen はもう 3 箇所あるが、ö は用いられていない：

- (2) Du soltest aber frölich vnd gut muts sein, ……

「おまえもきげんをよくして喜んでくれてもいいだろう。」

(ルカ 15 - 32)

- (3) …… , so du gleuben würdest, du soltest die herrligkeit Gottes sehen.

「もしおまえが信じるならば、神の栄光を見ることになる。」

(ヨハネ 11 - 40)

- (4) Soltestu dein leben fur mich lassen ?

「おまえは私のために命を捨てるというのか。」 (ヨハネ 13 - 38)

次に wollen に関して、幹母音が ö である例をいくつか挙げよう。

- (5) Vnd niemand ist, der vom Alten trincket, vnd wölle bald des neuen, ……

「古いぶどう酒を飲んだすぐあとに、新しいぶどう酒を欲しが人は誰もいない。」 (ルカ 5 - 39)

- (6) Ist er der König Israel, So steige er nu vom creutz, so wöllen wir jm glauben.

「もし彼がイスラエルの王なら、今すぐ十字架から降りてみるがいい。そうすれば信じてやろう。」（マタイ 27 - 42）

- (7) Wo zween vnter euch eines werden auff Erden, warumb es ist, das sie bitten wöllen, Das sol jnen widerfaren, von meinem Vater im Himel.

「もしおまえたちのうち 2 人が、地上で心をひとつにすれば、望むものは天なる私の父から与えられるのだ。」（マタイ 18 - 19）

上に挙げた 3 つの例文は、下線部を接続法と解釈する可能性のある文である。しかしこのうち、形態上明らかに接続法と識別できるのは (5) だけである。(6) に関して、たとえば *Gehen wir!* における *gehen* は 1 人称複数の接続法 1 式であり、¹⁴⁾ その書き換えが *Wollen wir gehen?* である。しかし少なくとも Nhd. では、この *gehen* や *wollen* が接続法であるという意識はなく、かろうじて語順によってのみ、命令の機能を果たしている。従って、(6) の文だけから *ö* と接続法の関係を論ずることは難しい。(7) に関しては、*warumb es ist, das sie bitten wöllen* を認容文と解釈するならば、*wöllen* が接続法 1 式である可能性もある。しかし *warumb es sei* となっていないこともあり、ここでも *wöllen* を接続法と断定する確実な決め手はない。

Philipp によれば、Frühnhd. において *wollen* の不定形と複数現在形には、*wollen* と並んで Mhd. と同じ *wellen*、さらに上部ドイツ語では円唇化した *wöllen* がある。¹⁵⁾ *wollen* と *wöllen* が併存していたことは確かである。しかし、この 2 つの語形をどのように使い分けるか、あるいは区別なしに用いるかは、個人的な文体にゆだねられていると見るべきであろう。1546 年の福音書では、*o* と *ö* が Modus の対立に関与している可能性は少ないと言える。その理由としてここでは、直説法 2 人称複数現在形として、*wolt* と *wöllet* が併存しているという事実を指摘しておきたい。

他の不規則動詞における幹母音の変化は、Nhd. と同じである。

1. 1. 3. 弱変化動詞

弱変化動詞の現在形と接続法 1 式の間で、幹母音による対立は見られない。

まとめ (1.1.)

直説法現在形と接続法 1 式の関係性を幹母音の観点から見た場合、1 人称単数形が Mhd. に比べ、Modus の対立を一層表示し得なくなっている。語尾に関しては、sollen と wollen が 2 人称単数で -t: -st の対立を保っている一方、強変化動詞と弱変化動詞に見られた 3 人称複数における -ent: -en の対立が解消された。

1.2. 直説法過去形と接続法 2 式

1.2.1. 強変化動詞

Mhd. から Nhd. にかけて、現在人称変化と同様、強変化動詞の過去人称変化においても、単数形と複数形の幹母音の統合が見られた。¹⁶⁾ まず第 1 種動詞の過去形幹母音は、単数形の ei が複数形の i に同化した。ルターはこの点、古い幹母音 ei を完全に残している。一方、Mhd. から Nhd. にかけて起こった二重母音化はルターも被っているため、不定形の幹母音は ei となっている。次に示すのは、Mhd., ルター, Nhd. における第 1 種動詞の 4 要形の幹母音である。

	Inf.	Sg.Prät.	Pl.Prät.	P.P.
mhd.	î	ei	i	i
Luther	ei	ei	i	i
nhd.	ei	i	i	i

ここで問題となっているルターにおける過去形と接続法 2 式の関係は、Mhd. と同じ状況にある。bleiben を例にとり、ルターと Nhd. における両者の語形 (単数形) を示すと次のとおり。

	Prät.	Konj. II
Luther	bleib	bliebe
nhd.	blieb	bliebe

Nhd. では、接続法 2 式を過去形から区別しているのは語尾 -e だけであるが、ルターでは語幹と語尾の 2 箇所 で区別されている。複数形は両者とも blieben で Modus の区別はつかない。

第 2 種動詞の過去形幹母音は、o と u が競合した後、o が単数と複数双方に

浸透した〔z.B. zog (sg.), zogen (pl.)〕。ルターにおいてもoが用いられている。¹⁷⁾ 1546年の福音書には、第2種動詞の接続法2式としてzögeとverlüre (= verlöre)があり、接続法では幹母音がoとuの間で揺れているのがわかる。

第3種動詞の過去形幹母音は、Nhd.では複数形のuが単数形のaに統合された〔z.B. half (sg.), halfen (pl.)〕が、ルターでは単数形aと複数形uの区別を残している。そして接続法2式は、幹母音uをもとにして形成される。¹⁸⁾

〔z.B. hülfte, gewünne (= gewönne), drängen (= drängen), fünde (= fände), würffen, stürbe〕。

werdenの接続法2式はほとんどがwürdeであるが、ウムラウトを欠いた語形(wurde)が若干見られる。もっとも、1546年の福音書では直説法単数過去形がwardであるため、単数形ではウムラウトの有無にかかわらず、Modusの対立が保たれている。

第4、第5種動詞では、Nhd.に至っても過去形幹母音に大きな変化は見られない。両者とも不定形の幹母音がe、過去形幹母音がaである(z.B. nehmen, nahm; geben, gab)。従って、過去形幹母音が変音して作られる接続法2式は、接続法1式、場合によっては直説法現在形と音声的に一致してしまう¹⁹⁾

(z.B. nehme: nähme)。さらに1546年の福音書では、この種の動詞の接続法2式のaウムラウトに対して、äの代わりにeが用いられている。たとえばneme (= nähme), gebe (= gäbe), sehe (= sähe), esse (= ässe), spreche (= spräche), geschehe (= geschähe)などがあり、複数形の例も見られる。これらは音声面だけでなく書記法の面でも、接続法1式あるいは現在形との区別がつかない。

第6種動詞の過去形幹母音に関しては、二重母音と単母音の違いはあれ、Mhd., ルター, Nhd.ともに同じ状況である。接続法2式は1546年の福音書においても、過去形幹母音が変音して作られる(z.B. trüge, füre)。

第7種動詞の接続法2式は、幹母音が過去形と同じであるため、語尾の-eによってのみModusの違いが表示される(z.B. lies (ind.): liesse (konj.))。この点、幹母音を異にする第1種動詞〔z.B. bleib (ind.): bliebe (konj.)〕とは異なっている。複数形においては第1種動詞と同様、Modusの区別はなくなる〔z.B. liessen (ind.): liessen (konj.)〕。

1.2.2. 不規則動詞

不規則動詞の中ではtunとhabenが問題となる。Mhd.においてtunの過去形

は、1・3人称単数で têt(e), tet(e), 接続法2式は tæte, tēte, habenの過去形は hâte, hêt(e), hêt(e), het(e) 等々, 接続法2式は hæte, hēte, hete 等々である。過去形の tât, het は18世紀に至るまで, tat, hatteと並んで用いられている²⁰⁾。従って Fröhnd. においても, 場合によっては Mhd. と同様, Modus の区別がつきにくい状況にあった。

1546年の福音書の場合はどうであろうか。habenに関しては, 過去形が hatte, 接続法2式が hette と使い分けられている。一方 tunに関しては, 接続法2式は thet であるが, 過去形は thet と that が併存している。数の上では thet が圧倒的に多く, that はごくわずかである。また, 過去形の幹母音 e は複数形にも及んでいる (theten)。このようなことから, tunに関しては, 幹母音による Modus の区別はないと言える。

1. 2. 3. 弱変化動詞

弱変化動詞の幹母音に関しては, ほとんどが過去形と接続法2式の間に区別がない。ここで問題となるのは, 逆ウムラウトをもつ動詞である。Mhd. では数の多かった逆ウムラウト形も, Fröhnd. の時期を通じて次第に減っていった。1546年の福音書においては, Nhd. ではもはや見られない逆ウムラウト形〔z. B. satzte (= setzte), strackte (= streckte)〕が用いられている一方, 同じく Nhd. には見られない, 逆ウムラウトを解消した過去形も用いられている〔z. B. bekenneten (= bekannten), nennet (= nannte)〕。そしてこれらが setzte, bekanneten といった語形と併存して現われる。そのため, 逆ウムラウトしていない語形においては, 過去形と接続法2式の区別がつかない。

まとめ (1. 2.)

過去形と接続法2式の関係を幹母音の観点から見た場合, 強変化動詞ではまず第1種動詞の単数形が, 直説法で古い幹母音 ei を残しているのも, Modus の区別が明瞭である。第4, 第5種動詞では, 接続法の a ウムラウトが e で表示されているため, 音声面だけでなく書記法の面でも, 接続法1式あるいは現在形との区別がつかない。これは Nhd. の文章語と異なる点である。不規則動詞では, tun の過去形と接続法2式の間で, 幹母音による区別がない。弱変化動詞では, いわゆる混合変化動詞に, 逆ウムラウトのあるものとないものが併存しているため, Nhd. と違って Modus の識別が困難である。

2. 語尾の e

これまで、動詞の幹母音がModusの対立にどれほど関与しているかを見てきた。次に、動詞の語尾-e, -est, -etにおけるeが、Modusの対立に関与しているのかどうかを検討していく。

Nhd.で、たとえばdu trinkst (ind.)とdu trinkest (konj.)においては、語尾におけるeの有無がModusの違いを表わしている。同様にihr trinkt (ind.)とihr trinket (konj.), さらにer ging (ind.)とer ginge (konj.)においても、eがModusの対立に関与している。²¹⁾

ところで、Mhd., Frühnhd.を通じて、アクセントのない語中音、語末音のeは、Synkope (語中音消失)とApokope (語末音消失)によってしばしば脱落した。たとえばihr trinket (konj.)がihr trinkt (konj.)になり、er ginge (konj.)がer ging (konj.)になるという現象がしばしば起こった。以下においては、こうした状況のもと、ルターが-e, -est, -etにおけるeをどのように扱い、それがModusの対立にどの程度影響しているかを考察していく。

2. 1. 直説法現在形と接続法 1 式

2. 1. 1. 1・3人称単数

Nhd.では、1人称単数現在形および1・3人称単数の接続法1式の語尾は、いずれも-eである。1人称の場合は、形態上Modusの区別がない〔z.B. ich komme (ind.): ich komme (konj.)〕。3人称の場合は、語尾-tの有無によってすでにModusの対立が成立しているため、接続法の語尾-eは副次的なものになっている〔z.B. er kommt (ind.): er komme (konj.)〕。

さて1546年の福音書の場合、1人称単数においては、1. 1. 1.で述べたように、幹母音によるModusの区別がない。このような場合、直説法と接続法を選び分ける基準として、動詞の形態以外のものを導入せざるをえない。すなわち、次稿で詳しく扱うことになる統語論的な要素を拠り所として、機能から形式を導き出すことになる。このことを簡単に説明していきたい。1546年の福音書において、接続法を要求する文の種類として、第一に目的文が挙げられる。以下に示すのは、3つの異なる接続詞によって導かれた目的文である。

- (8) DA ward Jhesus vom Geist in die Wüsten geführt, Auff das er von dem Teuffel versucht würde.

「イエスは悪魔に試されるため、聖霊に導かれて荒野へ行った。」

(マタイ 4-1)

- (9) Vnd des menschen Son wird vberantwortet werden, das er gecreuziget werde.

「そして人の子は十字架にかけられるために引き渡される。」

(マタイ 26 - 2)

- (10) Oder was kann der Mensch geben, damit er seine Seele wider löse ?

「あるいは、人は自分の魂を買い戻すために、何を与えることができようか。」 (マタイ 16 - 26)

(8) では würde という語形そのものから、(9)(10) では 3 人称単数に対する werde, löse という語形から、いずれも接続法であることが明らかである。1546年の福音書にはこの種の文が非常に多いことから、目的文は接続法をとるという一応の原則をたてることができる。この原則を 1 人称単数の場合にも適用することによって、たとえば次の文における ererbe が接続法と解釈される。

- (11) …… , was sol ich thun, das ich das ewige leben ererbe ?

「永遠の命を手に入れるには何をすればいいのですか。」 (マルコ 10 - 17)

同じような手順で、以下の文における下線部の動詞も接続法とみなされる。

- (12) Setzet euch hie, bis das ich dort hin gehe, vnd bete.

「私がそこへ行って祈り終わるまで、ここにすわっていなさい。」

(マタイ 26 - 36)

- (13) Es sey denn, das ich in seinen Henden sehe die Negelmal, vnd lege meinen finger in die Negelmal, vnd lege meine hand in seine Seiten, wil ichs nicht gleuben.

「私が彼の手に釘の跡を見て、そこに私の指をさし入れ、彼のわき腹に手を入れてみなければ、私は信じない。」 (ヨハネ 20 - 25)

- (14) So jemand wil des willen thun, der wird innen werden, ob diese Lere von Gott sey, oder ob ich von mir selbs rede.

「このかたの意志を実行しようとする人なら、この教えが神から出たものなのか、それとも私が自分で話しているのかわかるだろう。」

(ヨハネ 7 - 17)

- (15) So sage ich euch auch nicht, aus waser (= was für) macht ich solchs thue.

「それなら私も、自分が何の権威でこういうことをやっているのかを、おまえたちに言うわけにはいかない。」 (マルコ 11 - 33)

以上のようなやり方で、1人称単数の接続法1式とみなしてさしつかえないと思われる語が抽出された。ここではじめて、直説法現在形との比較が可能となる。Frankeによれば、1540年以降、1人称単数の語尾-eの脱落は減っており、1545年の聖書では-eのない語も少なくはないが、-eのついた語形が圧倒的に多い。²²⁾ 1546年の福音書においても-eのついた語形が多く、直説法ではhabとhabe, treibとtreibe, thuとthueが併存しており、接続法ではthuとthueが併存しているのみで、それ以外は語尾-eを保っている。²³⁾

一方、3人称単数の接続法1式において、-eのない語形としてはwerffとlasだけが確認された。

以上のことをまとめると、1人称単数現在形、1人称単数接続法1式、3人称単数接続法1式における語尾は、原則として三者とも-eである。1人称においてはModusによる幹母音の変化がないため、結局三者は同じ語形である。²⁴⁾

2.1.2. 2人称単数

2人称単数形は1人称単数の場合と比べ、動詞によっては直説法で幹母音に変化するので、語幹からModusを識別することがある程度可能である。ルターの場合、たとえばfellest, sihestが直説法, nemest, gebestが接続法であることは、幹母音によって明らかである。本稿で集められた接続法1式のうち半数以上は、今のように幹母音を拠り所として抽出しえたものである。残りのものは、1人称単数の場合と同じ統語論的な基準によって、接続法と認定したものである。

さてNhd.では、2人称単数における現在形と接続法1式は、語幹がd, tで終わっている場合(z.B. bitten)などを除いて、語尾のeによっても区別されている[z.B. du kommst (ind.): du kommest (konj.)]。これに対して1546年の福音書では、直説法も接続法も、ほとんど規則的なまで語尾のeを保って

いる。このようなことから、2人称単数においては、語尾のeはModusの対立に関与していないと言える。従って、幹母音が変化しない動詞では、kommst : kommestのような対立がないために、形態からModusを識別することは不可能である。

2.1.3. 2人称複数

2人称複数形は幹母音が変化しないため、語幹からModusを識別することはできない。Nhd.では語尾におけるeの有無によってのみModusを区別している [z.B. ihr kommt (ind.): ihr kommet (konj.)]。1546年の福音書では、大多数の2人称複数形が語尾のeを保っている。従って、接続法だけでなく直説法においても、語尾のeを保っている語形が圧倒的に多い。以上のことから、2人称複数においては、1人称単数と同様、形態からModusを識別することは不可能である。

まとめ (2.1.)

1人称単数では、現在形も接続法1式も語尾にeを保っており、形態上Modusの区別はない。3人称単数の接続法1式にも、語尾にeが保たれているが、すでに語尾tの有無によってModusの区別は明瞭である。2人称単数ではModusにかかわらず語尾のeが保たれており、Modusの識別は幹母音に変化のある動詞にのみ可能である。2人称複数においても、Modusにかかわらず語尾のeが保たれており、形態からModusを識別することは不可能である。

2.2. 直説法過去形と接続法2式

2.2.1. 強変化動詞

強変化動詞の過去形と接続法2式に関しては、接続法の幹母音が変音するものとしないうとで違いが出てくる。たとえばNhd.において、幹母音が変音する接続法2式は、1・3人称単数の場合、幹母音と語尾-eの2つの要素によって直説法過去形から区別される [z.B. kam (ind.): käme (konj.)]。これに対して幹母音に変化のない接続法2式は、語尾の-eによってのみ直説法から区別される [z.B. ging (ind.): ginge (konj.)]。

さて1546年の福音書では、変音可能な動詞はすべて、ウムラウトと語尾-eの2つの要素によって接続法2式が形成される (z.B. würffe, zöge)。ただし1.2.1.で述べたように、ルターはaウムラウトをeで表示しているため、接続法1式、接続法2式、直説法現在形の区別のつかない動詞が少なからずある

(z.B. gebe, spreche)。これらの動詞に関して、接続法 1 式と 2 式を識別する方法はないだろうか。この問題を解決するひとつの手段として、時制の一致が挙げられる。1546 年の福音書においては、現在形主文に対する従属文では接続法 1 式が用いられ、過去形主文に対する従属文では接続法 2 式が用いられるという時制の一致の原則が守られている。このことから、主文の時制を吟味することによって、上に挙げた gebe, spreche 等を接続法 1 式と接続法 2 式とに選り分けることが可能である。

次に、接続法 2 式で変音しない動詞においても、基本的には語尾の -e が保たれている (z.B. gienge, liesse)。しかし、コンテキストから考えて接続法と解釈できる動詞で、語尾の -e を欠いているものが若干ある (z.B. gieng, lies)。この場合は、形態上 Modus の対立がなくなってしまう。

ところで、強変化動詞の 1・3 人称単数過去形は、14～15 世紀に語尾 -e をとる傾向が広まり、ルターにもその影響が及んでいる。²⁵⁾しかし 1546 年の福音書を見る限りでは、規則的なまでに -e を保っているのは sahe だけである。少なくとも、この語尾 -e によって Modus の対立に大きな混乱が生じているような語形は見あたらなかった。

2.2.2. 不規則動詞

まず過去現在動詞の場合、sollen を除いて、過去形と接続法 2 式の区別はもっぱら幹母音の変音による。語尾の -e は Modus にかかわらず、保たれる場合 (z.B. kündte, wuste) と脱落する場合 (z. B. künd, kund) がある。一方 sollen は、1.1.2. で挙げたウムラウト形を除けば、原則として幹母音は変化しない。語尾に関しては、-e のある語形 (solte) と -e のない語形 (solt) が併存しており、そこに Modus による違いはないと言える。

wollen も sollen と同様、語尾の -e に関しては揺れが見られ、wolte と wolt が併存している。

tun の過去形は 1.2.2. で述べたように、ほとんどが thet であり、幹母音は接続法 2 式と同じである。本稿で集めた接続法 2 式の数が少ないので確かなことは言えないが、3 人称単数で語尾の -e を欠き、直説法と区別のつかない例をひとつ挙げておきたい：thet (konj.) マルコ 15-8。

sein と haben の接続法 2 式 were, hette には語尾の -e が保たれているが、直説法との違いはすでに幹母音によって明らかである。

2.2.3. 弱変化動詞

弱変化動詞の過去形に関して、ルターでは語幹の直後に e が現われることが

多く、²⁶⁾ また一方、語尾の *e* が脱落することもあるので、実際の過去形はさまざまな形で現われる。たとえば *sagen* の過去形として、*sagt*、*saget*、*sagte*、*sagete* の 4 種の語形が現われる。とりわけ *-t*、*-et* の形は現在形と区別がつかない。²⁷⁾ このような状況は接続法 2 式においても同じである。従って、過去形と接続法 2 式は形態上の区別がない。

まとめ (2.2.)

Nhd. と比べ、語尾の *-e* が脱落することによって、過去形と接続法 2 式の区別がなくなる場合がある。強変化動詞のうち、過去形と接続法 2 式の間で幹母音が変音しないものでは、しばしば Modus の識別が困難となる。不規則動詞では *sollen*、*wollen*、*tun* に Modus の区別がない。弱変化動詞では、語尾が *-t*、*-et*、*-te*、*-ete* のように多様であり、そこに Modus の区別はない。

以上、1546 年の福音書を資料として、ルター聖書における動詞の形態を、Modus の形態的対立という観点から考察した。その結果、形態から識別可能な接続法を挙げれば次のようになる (算用数字は人称を、ローマ数字は強変化動詞の種類を示す)。

接続法 1 式

Sg. 1. ……過去現在動詞, *sein*, *wollen*

Sg. 2. …… I, III-a を除く強変化動詞, 過去現在動詞, *sein*, *haben*, *wollen*

Sg. 3. ……すべての動詞

Pl. 1. 3. …*sein*

接続法 2 式

Sg. 1. 3. …強変化 I, II, III, VI, VII (部分的に語尾 *-e* を欠く語形がある),
sollen を除く過去現在動詞, *sein*, *haben*

Pl. 1. 2. 3., Sg. 2. ……強変化 II, III, VI, *sollen* を除く過去現在動詞, *sein*,
haben

(強変化第 4, 第 5 種は、2・3 人称単数で接続法であることは識別可能であるが、1 式と 2 式の区別は形態からはわからない。)

次稿では、接続法の統語論的な問題を扱う。その際、形態上明らかに接続法とわかる語形のみを、さしあたって考察の対象とすることになれば、上に挙げ

た動詞が拠り所となろう。

注

- 1) D.Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) 6.Band Die Deutsche Bibel 1929.
- 2) 接続法現在形 (Konjunktiv Präsens), 接続法過去形 (Konjunktiv Präteritum) という名称は, 接続法の表わす時間関係を正確に反映していないことから, 近來, 接続法 1 式 (Konjunktiv I), 接続法 2 式 (Konjunktiv II) という名称が多く用いられるようになっている。本稿でも後者の名称を用いることにし, 単に現在形, 過去形と言った場合は直説法を指すものとする。
- 3) Russ p. 155 ~ 156.
- 4) Franke S. 189, 348, Moser S. 197.
- 5) Moser S. 198.
- 6) Ebd. S. 202.
- 7) 不規則動詞の項目では過去現在動詞, wollen, tun, sein, habenを扱う。stehenは強変化第 6 種, lassenとgehenは第 7 種として扱った。
- 8) Franke S. 343 ~ 344, Moser S. 210 ~ 211.
- 9) sollest (konj.) は構造上ありうる語形として挙げたが, これを除いて, 例示した語形はすべて 1546 年の福音書から集めたものである。本稿では紙幅の都合上, 文の形で挙げた例以外は, 福音書の箇所を示さなかったことをここで断わっておきたい。
- 10) Moser S. 211.
- 11) Ebd. S. 210.
- 12) Franke S. 344.
- 13) ルターを引用する際, 彼がウムラウト記号として用いた小さい e は..に改めた。
- 14) Dal S. 140.
- 15) Philipp S. 75.
- 16) Russ p. 154 ~ 155.
- 17) Moser S. 197.
- 18) Franke S. 350.
- 19) 口語における e と ä の音声的対立の有無については Bausch (S. 157 ~ 160)

を参照のこと。

20) von Kienle S. 316, 321.

21) Bausch (S. 160 ff.) によれば、こうした語尾の e が口語では脱落し、直説法と接続法の区別がなくなっている。ルター聖書に口語がどれほど反映されているかはともかく、本稿ではあくまで文章語における現象として、この e を考察していく。

22) Franke S. 293.

23) 本稿では、直説法の語は主としてマタイ福音書からのみ集めたことを、ここで断わっておきたい。

24) sein 動詞や過去現在動詞などはその限りではない。

25) Franke S. 316 ~ 317, Moser S. 203.

26) Nhd. では、この e は口調上の e として限られた音声環境にしか現れない。

27) 実際 Franke (S. 330) は、-t の語形に関して歴史的現在形の可能性を指摘しているが、これに関する考察は別の機会に譲りたい。

参 考 文 献

Bausch, Karl-Heinz: Modalität und Konjunktivgebrauch in der gesprochenen deutschen Standardsprache. Teil 1 (= Heutiges Deutsch 1/9.1) München 1979.

Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax, Tübingen 1966³.

Franke, Carl: Grundzüge der Schriftsprache Luthers II, Hildesheim 1973 (= Nachdruck der zweiten Auflage Halle 1914)

von Kienle, Richard: Historische Laut- und Formenlehre des Deutschen, Tübingen 1969.

Moser, Virgil: Historisch-grammatische Einführung in die frühneuhochdeutschen Schrift dialecte, Hildesheim 1971 (= Nachdruck der Ausgabe Halle 1909)

Philipp, Gerhard: Einführung ins Frühneuhochdeutsche. UTB 822, Heidelberg 1980.

Russ, Charles V. J.: Historical German Phonology and morphology, Oxford 1978.

Eine morphologische Untersuchung des Konjunktivs in der Lutherbibel

YASUHIRO KUDO

In dieser Abhandlung habe ich die Konjugation in den Evangeliumbüchern der Lutherbibel (1546) unter dem Gesichtspunkt der morphologischen Opposition zwischen dem Indikativ und Konjunktiv untersucht.

1. Stammvokal

1.1. Präsens und Konjunktiv I

Im Laufe der frühnhd. Zeit wurde bei den starken Verben der Unterschied der Stammvokale zwischen Sg. und Pl. des Präs. ausgeglichen. In der Klasse II assimilierte sich der Vokal des Sg. "iu" (z.B. mhd. ich biuge, du biugest, er biuget) an den Vokal des Pl. "ie" (z.B. nhd. ich biege, du biegest, er biegt). Bei Luther gilt "ie" nur für die 1. Person, während in der 2. und 3. Person "eu" steht. In der Klasse III-b, IV und V assimilierte sich der Vokal der 1.Sg. "i" (z.B. mhd. ich hilfe, nime, gibe) an den Vokal des Pl. "e" (z.B. nhd. ich helfe, nehme, gebe). Auch bei Luther ist dieses "e" aufzufinden. So kann der Stammvokal der 1. Person bei Luther im Vergleich zum Mhd. immer weniger die Modusopposition bezeichnen.

In Beziehung auf "sollen" und "wollen" ist oft hingewiesen, daß die Konjunktivform einen Stammvokal "ö" hat. Bei Luther steht aber dieses "ö" zuweilen auch im Ind. Man könnte daher sagen, daß "o" und "ö" für die Modusopposition nicht relevant ist.

In Beziehung auf die Endung ist die Opposition -t(ind.) : -st(konj.) in der 2.Sg. von "sollen" und "wollen" erhalten, während die Opposition -ent(ind.) : -en(konj.) in der 3.Pl.

der starken und schwachen Verben zugunsten des -en ausgeglichen ist.

1.2. Präteritum und Konjunktiv II

Bei den starken Verben ist in der Klasse I der alte Stammvokal "ei" im Ind.Sg. erhalten, so daß die Modusopposition klar ist (z.B. bleib(ind.) : bliebe(konj.)). In der Klasse IV und V ist der a-Umlaut des Konjunktivs mit "e" bezeichnet (z.B. gebe=gäbe). Hier gibt es nicht nur phonetisch sondern auch orthographisch keinen Unterschied vom Konj.I oder Präs.

Bei den unregelmäßigen Verben gibt es in Beziehung auf "tun" keinen Unterschied zwischen dem Prät.(thet) und Konj.II(thet).

Unter den schwachen Verben besteht im Nhd. die Modusopposition bei den Verben mit dem Rückumlaut (z.B. bekannte(ind.) : bekennte(konj.)). Bei Luther dagegen steht ein und dasselbe Verb sowohl mit Rückumlaut als auch ohne Rückumlaut (z.B. bekannte/bekennte(ind.)). Hier ist der Modus schwer zu unterscheiden.

2. Das "e" in der Endung -e, -est, -et

2.1. Präsens und Konjunktiv I

In der 1.Sg. ist "e" in der Endung sowohl im Ind. als auch im Konj. erhalten. Hier gibt es morphologisch keine Modusopposition (z.B. ich komme(ind.) : ich komme(konj.)). Auch in der 3.Sg.Konj. ist "e" in der Endung erhalten. Hier ist aber die Modusopposition schon durch "t" klar (z.B. er kommt(ind.) : er komme(konj.)). In der 2.Sg. ist "e" in der Endung ohne Modusunterschied erhalten (z.B. du kommest(ind.) : du kommest(konj.)). Hier gibt es die Modusopposition nur bei den Verben mit der Stammvokaländerung (z.B. du sihest(ind.) : du sehest(konj.)). Auch in der 2.Pl. ist "e" ohne Modusunterschied erhalten. Hier gibt es morphologisch keine

Modusopposition.

2.2. Präteritum und Konjunktiv II

Im Vergleich zum Nhd. ist "e" in der Endung für die Opposition zwischen dem Prät. und Konj.II nur wenig relevant. Vor allem bei den starken Verben, die im Konj. keinen Umlaut haben, ist die Modusunterscheidung oft wegen der Apokope schwierig (z.B. gieng(ind.) : gieng(konj.)). Unter den unregelmäßigen Verben gibt es bei "sollen", "wollen" und "tun" keine Modusopposition. Bei den schwachen Verben ist die Endung mannigfaltig, wie -t, -et, -te, -ete. Hier gibt es keine Modusopposition.